竹村民郎氏インタビュー（聞き手・稲賀繁美氏）　竹村民郎編『［編集復刻版］「職場の歴史」関係資料集　全四巻』（六花出版）をめぐって

一九五〇年代の「職場」から生活に根差した「歴史」が立ち上がる

『「職場の歴史」関係資料集　全四巻』復刻の意義を問う

竹村民郎 *TAKEMURA Tamio*

（聞き手・稲賀繁美） *INAGA Shigemi*

竹村民郎編『［編集復刻版］「職場の歴史」関係資料集　全四巻』が六花出版より刊行開始となった。これを機に、編者の竹村民郎氏に話を聞いた。聞き手は、本資料集に解説を寄せた国際日本文化研究センター教授の稲賀繁美氏にお願いした。（編集部）

職場の歴史を自分の生きる道として考える

稲賀　『職場の歴史』に「関係資料集」という副題を沿えて、復刊事業が始まりました。これを好機として京都の国際日本文化研究センターで「一九五〇―六〇年代転換期のサークル運動の位相」というシンポジウムを催しました（二〇一七年一二月二―三日）。『「サークル村」と森崎和江』（ナカニシヤ出版、二〇一三年）の著者、水溜真由美さんと、『繊維女性労働者の生活記録運動』（北海道大学出版会、二〇一五年）を公刊された辻智子さんに札幌よりお越しいただき、『「サークルの時代」を読む』（影書房、二〇一六年）の寄稿者のおひとり、徐潤雅さんにも加わっていただきました。多くの若手研究者が集いましたが、まずその総括からお願いします。

竹村　びっくりするのは、五〇年代の「サークルの時代」を研究対象として選ぶ若い研究者層がめざましく増えていること。このなかで「職場の歴史」が大きな役割を果たしていることの再認識も進んできた。思えば五四年から五五年にかけての時期がいわゆる「サークルの時代」。その真っただ中で立て続けに出版した『歴史評論』（以下『歴評』と略す）の「職場の歴史特集号」（五四年）、さらに『職場の歴史』（河出新書、五五年）は大きな反響を呼びました。

『歴評』特集号はお堅い学術雑誌なのにすぐに増刷、当時ポピュラーな教養書の新書も、たちまち版を重ねて、何万部も刷られたんだ。これには驚いたね。

稲賀　『思想の科学』にも関係する寄稿があったほか、『中央公論』や『婦人公論』にも書評が出たとのことですね。

竹村　例えば鶴見俊輔は『中央公論』で「日本の地下水」と評価し、誰にでも受け入れられる文化の運動だと位置づけた。新進の社会心理学者だった南博は『照魔鏡』（カッパブックス、一九五六年）の「国民文化欄」で、最尖端のサークル運動のひとつだと評価しました。上原専禄も『全逓文化』の座談会で「全逓」も「職場の歴史」を扱うべきだと論じました。一番的を射ていたのが『朝日新聞』（関西版、五六年五月七日付）の書評。同紙は「自分の身近な職場の歴史を綴ることによって、日本現代史に接近してゆこうという試みが現れた」、新書版『職場の歴史』は「新しい文化運動への序曲」であると位置づけてくれました。

稲賀　新聞や雑誌が「健全」だった時代ならではの反響とも見えますが、それにもまして一般読者といってよい、「知識人」ならざる層からの反響が意想外だったと聞いています。

竹村　『歴評』特集号と河出新書『職場の歴史』の出版に寄せられた全国読者の反響にもびっくりした。職場そのものを具体的に見つめ、職場の歴史を他人ごとではなく、自分の生きる道として考えて、読書カードを送ってくる。五五年は組合創立十周年。労組は「職場の歴史をつくる会」（以下「会」と略す）と組合史との関係を問いかけてくる。例えば北海道の王子製紙労働組合史編纂委員会の梅津信行氏からの会宛ての私信に、『歴評』職場の歴史特集号』を、偶然本屋で見つけて、従来の組合史とはまったく異なる労働者の歴史へのアプローチに驚いた、と書いて寄こした。組合も年とともに指導組織が官僚化して、末端との距離が大きくなる。それを常日頃、感じていたのでしょう。だから労働者同士の仲間意識が育まれ、それが組合づくりを契機として連帯の輪を広げてゆく様が具体的に書かれた「職場の歴史」は、とても新鮮に映ったらしく、わざわざ面会のため上京してきた。

「職場の歴史」
「職場の歴史」
職場の歴史
職場と生活
15
職場の歴史をつくる会
7
職場の歴史

▼竹村民郎編『［編集復刻版］「職場の歴史」関係資料集　全四巻（全二回配本。一回目は刊行済、二回目は五月予定）』B5判総約一七〇〇頁・揃本体八〇〇〇〇円・六花出版

稲賀　いわゆる労働運動史とはあきらかに肌合いの違う編集がなされたわけですが、ナマの「経験」を「歴史」へと文章化する編集の現場はどのような様子だったのでしょうか？

竹村　実際、私どもには、膨大な組合資料の分析方法や、組合史の方法論などを教える余裕など全くなかった。会に参加していた石母田正らの歴史家も、旧来の歴史研究の枠をこえる質問にはまったくお手上げ。ところが組合史の書き方を教えてほしいという問い合わせが、全国の組合史編纂委員会から、矢の催促で届く。会ではとにかくチームを組んで、北は青森銀行から福島県磐城市（当時の表記）の日本水素まで「巡行」して尽力しました。

稲賀　『日通労働運動史』第一巻の執筆もその一環でしょうか？

竹村　これは、日通労働組合編纂委員会からの依頼もあって、第一巻を私が書きあげたものです。当時、日高六郎、南博、鶴見俊輔とともに、私は「国民文化集会」の委員をつとめ、鶴見さんと私が「職場の歴史・生活記録分科会」の担当。その全国大会で私は、鶴見さんの協力も得て、国民文化会議に組合史つづりのセンターを常設することを提案しました。

稲賀　とはいえ、これは実現しない。

竹村　予算の問題がネックだったと思います。もうひとつ、文化運動のなかから生まれてくるガリ版刷りの機関誌・紙や文集などを保存・索引付公開・閲覧できるセンターの設立計画。これも実現できなかった。こうした貴重な一次資料で現在残っているものは、きわめて少ない。これらを抜きに戦後の文化運動を語るなんて、できない話だよ。

稲賀　『歴評』五五年五月号で「職場の歴史特集号」が編まれたわけですが、ここで簡単に内容に触れておきましょう。「N労組の歴史」（職場の歴史をつくる会N工場グループ）、「特急さくらが走るまで」（同・国鉄グループ）、「日鋼室蘭青年行動隊」（竹村民郎）、「私もついて行く」（同・東京証券取引所グループ）などが収められています。

竹村　この記録が示すように、会の創立直後、さまざまな職場サークルが「職場の歴史」を作る運動を始めました。おおむね、組合をつくるまでの記録や「職場闘争の歴史」などが中心でした。同年九月に会の機関誌『職場の歴史』が発刊されますが、ここでは初期とは違って、会の労働者やホワイト・カラーの会員個人の歴史を編集しました。必ず全員で合評会をした後、書き直して機関誌に掲載しました。

一九四七年、「民科」（民主主義科学者協会）歴史部会は、マクシム・ゴーリキーの工場史を書こうという提案（一九三四年開催のソヴェト作家同盟第一回大会）に学んで、そこから工場史を書くことを提案した。だがこれとは違って、会では、「自立」した自分史や職場の歴史を書いた。その点では、五〇年代のサークル運動の系譜のなかでも、注目すべき特色を持っていたはずです。「職場の歴史」の作品が、今日も若い人々に読まれている理由はここにあるのだと思います。

稲賀　とりわけ日本鋼管室蘭については、竹村さん自らが取材・執筆されていますが、いままで、その生々しい舞台裏については、ご自身で触れておられません。

竹村　私が、日鋼室蘭青行隊の人たちから聞き書きを取るために鉄鋼労連本部を訪れたのは、馘首反対闘争が暗礁に乗り上げ、その解決のため中労委（中央労働委員会）が斡旋交渉に入っていた時期でした。五三年七月二七日の朝鮮休戦協定の結果、鉄鋼産業は不況にみまわれ、鉄鋼業界はこの対応に苦慮していました。経営側は業界全体の合理化を目的とした再編成のために、平炉メーカーの淀川製鋼所、尼崎製鋼所、日鋼室蘭製鋼所に、あいついで大規模な馘首を伴う合理化を仕掛けてきた。五四年六月、会社は赤字の室蘭製作所鋼板部を中心に、一七日、九一五名の解雇を発表しました。

闘争に立ち上がった日鋼室蘭労組はまず北海道三井炭鉱労働連合会（北三連）の闘争に学び、職場闘争を柱として、青行隊、主婦の会を結合した闘争体制を組織したんです。いわゆる従来の労働争議の枠を超えた「ぐるみ闘争」（地域ぐるみ、社宅ぐるみ、家族ぐるみの闘争）です。当時、労働運動の組織的中心であった総評（日本労働組合総評議会）の指導者、高野実事務局長・石黒清組織部長（炭労）は、日鋼室蘭闘争勃発後、ただちに全力をあげて指導に乗り出した。このふたりの闘争方針の核心にはもちろ（ノ）（ノ）ん「ぐるみ闘争」中心主義があった。だから日鋼室蘭闘争の特徴としても、ジャーナリズムは「ぐるみ闘争」を書き立て、その過程で青行隊、主婦の会が脚光を浴びたんです。これに反対したのは、太田ラッパで有名な合化労連（合成化学産業労働組合連合）委員長の太田薫・岩井章国労企画部長の線で、かれらは左派社会党主流派の全逓、全電通、私鉄と連繋して、いわゆる産業別統一闘争を主張したわけです。

▲「父の歴史を語る会」の様子。1957年９月。右端に談笑する石母田正。左端に竹村ちよ、その隣が竹村民郎。「職場の歴史をつくる会　銀座Ｍ百貨店グループ」の皆さんとともに。

稲賀　その際、日本共産党の関与はどのようなものだったのでしょうか？

竹村　『アカハタ』は年末に突如、高野の労働運動は政治主義だと批判して、日鋼室蘭闘争勝利の方向を今後も踏み固めよう、と言い放ちました。しかし実際には、一二月三〇日、組合は希望退職者四五名、六六二名の解雇という中労委の斡旋案を「涙の全国大会」で認めさせられていたんです。共産党は「勝利」宣言を出すよりほかに、もっとやるべきことがあったのじゃあないでしょうか。総評だって、翌五五年の第六回大会における高野対岩井の事務局長候補争いの過程で、産業別闘争か地域闘争かで激しく対立して、マスコミを賑わしたけれど、結局、日鋼室蘭闘争敗北の原因についての討論は低調なまま終わりました。つまり、高野が日鋼室蘭闘争敗北の責任をとって事務局長を辞任して、岩井事務局長が就任しただけの人事問題中心大会に終始したんです。日鋼室蘭闘争の敗北は、たんに労働問題にとどまらず、軍需から民需への転換、兵器生産の再構築などの重大な問題に深く拘わっていました。

稲賀　ここには『独占と兵器生産――リベラリズムの経済構造』（勁草書房、一九七一年）の著者である竹村さんの実績が裏打ちされていると思いますが……。

竹村　その通り。さすが稲賀さん。敗戦後、戦争をひきずって生きてきたはずの日本人だったとしたら、日鋼の経営側に文句のひとつもつけなかった理由がわからない。本当だったら、前述の総評第六回大会でもっと真剣に我が国有数の兵器生産工場の合理化闘争敗北の「自己批判」を尽くすはずだよ。高野の首を取るだけでシャンシャン大会とは何だったんだろうね。敗戦後の十年間、実は革新政党も労働組合も共に、戦争や戦後の兵器生産の再建について、ほとんど考えてこなかったんじゃないかって気がするよ。

稲賀　戦前・戦中の鉄鋼業界と軍需産業との関係や、その戦後の推移、朝鮮戦争による特需との関わりなど、現在の若い人には、もはや理解が困難かと思われますが。

竹村　今の人には日鋼室蘭なんて死語だね。実は同工場はアジア一番の一万トン・プレスを装備して、戦艦「長門」、「陸奥」の主砲や砲身だけではなく、日本海軍が建造した史上最大の戦艦「大和」の装甲板も、ここで製造されました。だから工場には、軍隊のごとき身分制と監視体制が布かれ、憲兵による強制労働が実施されていた。五〇年代にはまだ日鋼室蘭の真実の歴史を知っている人がなお沢山いた。とすれば日鋼室蘭闘争に知らん顔なんかできないはずだよ。日鋼室蘭闘争が敗北した後、五五年からは、日本人はそんなことは一切忘れて腹一ぱい美味しいものを食べて、ひたすら高度成長路線を突っ走ったんだ。そしてふと気が付いたら、バブル崩壊後の三〇年を経て、二一世紀の格差社会の真只中に放り込まれていたんだ。今日、格差をとがめる運動や世論の声が五〇年代当時と比べ、ますますか細くなっている。それを見て私は愕然としています。これで、なぜ私が日鋼室蘭労組や青行隊の有志の人たちや、賛同してくれた歴史家や学生と共に、一九五四年に会をつくったのか、ご理解いただけると思いますが、どうですか。

▲「父の歴史を語る会」1957年９月。後列左より、田中正俊（横浜市立大学教授）、ひとりおいて宮沢武人（国鉄品川客車区職場の歴史グループ）、中列左から二人目、岡島博（国鉄品川客車区職場の歴史グループ）。前列左より、清水澄夫（恩給局職場の歴史グループ）、ひとりおいて藤本敏雄（N工場グループ）、竹村ちよ、竹村民郎。銀座M百貨店グループおよび東大、上智大、教育大、早稲田大、慶応大の各学生グループのひとびとととともに。

職場の崩壊にたいして、いかに対応すべきかのヒントがここに

稲賀　「職場の歴史」といわば同時代に平行する「生活記録運動」との関係については、いかがでしょうか。

竹村　「職場の歴史」の運動は、もともと労働運動の発展のなかから必然的にうまれてきたものなので、当時言われた意味での「科学運動」の枠からはみ出す側面もあったわけです。形としてはサークル運動として生産点、生活点に根をおろしながら展開されていった。だから「職場の歴史をつくる運動」と生活記録運動の両者は、スタイルとしては相似でありました。

稲賀　一九五四年には木下順二・鶴見和子の共編で『母の歴史』（河出新書）が出されています。ここには長野県伊那谷出身で三重県四日市の東亜紡績工場で働く女子工員たちの書いた生活記録が収められています。当時の女工さんたちは、今も旧交を温めておられ、辻智子さんからは、その経験者たちの生き生きとした語り口を伝えていただきました。

竹村　『母の歴史』は、農村から出稼ぎの女子労働という、我が国の社会の深部に存在する重大な社会問題をアピールしたとして、これも大きな反響を与えたのです。「職場の歴史」と「母の歴史」のふたつの運動は、明らかに五〇年代の知識人の課題としての新しいインテリの誕生という問題を深く示唆するものであり、両者はこの点で共通していました。だから、井上清氏や鶴見和子氏もこのふたつの運動の役割に言及し、知識人が新しいインテリへ転生する可能性について積極的に評価していたんです。

稲賀　「職場の歴史」と「母の歴史」との関わりについても、竹村さんは現場に立ち会った生き証人ですが、ともに「生活記録運動」の一環をなす両者の違いとは何でしょうか？

竹村　前述のとおり、会は成立当初から企業合理化に大きな関心をもっていましたが、その背景には、四六年に成立した経済団体連合会（経団連）に象徴される資本側の企業整備のための合理化の問題が存在していました。五〇年代、総評傘下の労働運動は、当然こうした企業整備のための合理化攻勢には、極めて自覚的であり、三井鉱山企業整備反対闘争、日本製鋼室蘭製作所闘争の推進により、これへの反撃を展開した。

だから会創立の直後から、企業整備のための合理化というのは、どういうことなんだと問うていた。これは会にとっては重要なテーマだったんだよ。とくに中小零細企業のN工場職場サークルの会員たちは、五五年歳末のモチ代要求交渉に際して、その四カ月前に経団連の会員となった社長に押しまくられて何も言えず、交渉は会社の線で妥結させられた。それで彼らは経団連筋の情報には強い関心をもったんだね。だからね、会の活動は、単なる歴史愛好家のサークルなんかじゃあなかったんだ。まず何よりも、会は働くものを主体とする社会のあり方を模索して、その実現をめざす運動であったんですよ。

稲賀　川崎製鉄の労働者は、「歴史がむづかしい学問ではなく、自分たちが作っているものだ、ということを知った」と述懐したとのことですが……。

竹村　この発言は、会の運動の基調にある「思想」を的確に突いています。生活記録者運動もまた自分たちの生活を反省し、それらを記録に止めて、よりよい生活を築くための土台にしようとする点では共通している。だが、生活記録運動では、ともすると抽象的概念を拒否するあまり、実感主義により偏ってしまうこともありましたね。

稲賀　大宅壮一は「人生雑誌」のことを「マルクスみかん水」、つまり教条理論を甘く水増しして飲めるようにした代物と、いささかジェンダー・バイアスのある揶揄をしましたが……。

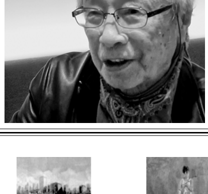
竹村　ある意味では、生活記録運動にも、「生活綴り方」の影響を受けた母娘の世代意識が反映していて、「人生雑誌」の延長上で、なにか共通するものが、あったのかもしれないね。

稲賀　最後に、冒頭で触れた日文研でのシンポジウムに立ち返り、今後の課題を展望して頂けますか。

竹村　今、政府が国会に提出している「働き方改革」は、労働者の権利を守る視点に立ち、企業文化、ライフスタイル、働き方を根本的に変革させるものといわれる。この法案を前にして多くの人々がすぐさま思い出したのは、「電通」の高橋まつりさんが過労自殺してしまったあの事件です。今日、月一三〇時間超の労働時間という現実が、長時間労働の再検討から出発し、根本的な改善の方向を示すのが、政府のいう「働き方改革」だということになるのでしょう。だがしかし、「職場」の崩壊が云々される現代社会から見れば、「働き方改革」の内容が不充分で、穴だらけであることは否めない。この恐るべき現実にどう対処すべきか。五〇年代サークル運動論について、最近若手の研究者のあいだでも多くの論議がなされています。しかしこれが、今の職場崩壊の問題と結びついてこない。でも戦後日本で、職場がいつから崩壊し始めたかは大問題のはずだよ。それなのに「働き方改革」に対して現代史研究者からきちんとした意見がでてこない。五〇年代のサークル運動にこだわってきた私どもは、とにかく「歴史」に真剣に向き合ってきた。職場の崩壊にたいして、いかに対応すべきかを「考えるヒント」が「職場の歴史」にはあったのではないか。これが前述したシンポジウムからの提言であります。

稲賀　現今の「職場の崩壊」には、法令による規制強化だけでは、とても対応できない。これは『母の歴史』に見られる表現ですが、糸を綴り、布を織る営みは、社会を織り上げる営みの直喩でしょう。東亜紡績三重工場の女工であった鈴木久子さんの紡ぎだした言葉です。竹村さんも新書版『職場の歴史』の「あとがき」で、藤本敏雄さんの体験を踏まえ、職人の手に刻まれた皺や、指に残る傷跡から職場の歴史が芽生える様を描いておられますね（「この手千両」）。社会「深層」の無自覚が「詩」となり言葉として分節される瞬間。そこに「手仕事」として自らの歴史が浮かび上がる。そうしたかけがえのない体験が『職場の歴史』には息づいている。「コトバが劈かれる時」を喪失してしまった現在を問い直すための糸口が、藁版紙のガリバン刷りの冊子の文字たちには、しかと秘められているように思われます。

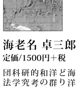
本日は貴重な体験を拝聴できました。あらためて御礼もうしあげます。（了）



▼竹村民郎（たけむら・たみお）氏＝1929年大阪生まれ。社会学者。著書に『大正文化』『廃娼運動』など。

文芸散策

企画・制作　東報堂
お問い合わせ
03（6869）8370



『頭は文明に体は野蛮に』―海洋地質学者、父・田山利三郎の足跡―

海老名卓三郎
定価/1500円＋税

海洋地質学者・田山利三郎の足跡をたどり、パラオ共和国・ニューギニア島・南洋群島・明神礁などを描き仏教的な平和の思想に帰着する、私的文化人類学的考察第二弾。宮城県立がんセンター研究所免疫学部長、東北福祉大学健康科学部教授、仙微研クリニック院長、財団法人仙台微生物研究所理事長。

『境川　柏尾川・引地川を歩こう』

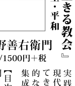
久米準
定価/1944円（税込）
230クラブ出版社

東京都町田市、八王子市、神奈川県城山町の境から流れ出て、江ノ島近辺の相模湾に注ぐ境川と柏尾川、引地川に沿った散歩道の、橋や寺社、史跡等を中心としたガイドブック。96年刊「境川を歩こう」増頁改訂。著書「ワンちゃんありがとう」「山の心・道しるべ」「先生の約束」

『そこにいのちのあるかぎり』　だれもが己の人生を生きる"今日"を目指して

桐生清次
定価/1500円＋税

新潟で、知的障害者のための施設「虹の家」の園長を務める著者による渾身のエッセイ。もともとは、教育現場に身を置き、今でいうところの「特別支援学級」の担任となる著者が、以来40年以上にわたり知的障害者の生活と就労を支援していくことになる。本作品では、その豊富な経験と、彼らの向き合う姿勢がつづられる。同様の支援に携わる個人、団体にとって、大いに参考になる内容。

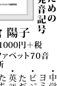


『現代に生きる教会　対話・共生・平和』

森野善右衛門
定価/1500円＋税

実践神学者として、また牧師として、現代に生きる教会のあり方を模索し続けてきた著者の、教会の本質論から実践的な問題提起にわたる、近年の論考を集成。

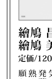
【目次より】Ⅰ 論座／Ⅱ 現代的教会論を問う／Ⅲ 惜別――師友を送り、その志に学ぶ／Ⅳ 聖書に聴く



『YESメソッド発音法　日本人のための新しい発音記号』

小倉陽子
定価/1000円＋税
アルファベット70音研究所

- ・日本で唯一の本格的な発音法です。
- ・中学生は各課ごとの新出単語にカンタンにヨミガナをふることができます。
- ・ビジネスマンも、専門職も通じる発音をただちにゲットできます。
- ・英語圏の人々、ALT、現場の教師、子供たちが絶賛する発音法です。
- ・テキストと合わせて学べるDVDビデオディスク付属。



『「赤い糸」みつけた』―赤い糸で結ばれた夫婦の60年―

繪鳩昌之
繪鳩美知子
定価/1200円＋税

仕事が違う私たちはよく「見合い？恋愛？」と聞かれましたが、私は「どちらかに決めつけないでよ」と。見合いのあと数回のデートで婚約、お互いの仕事もあり会うこともままなりませんでしたが、毎週の手紙が二人の気持ちに酵母のように働いて恋愛感情を発酵させていったのです。まるで本物のお酒が熟成されるように。誰もがこうありたいと願う理想的な夫婦の姿を書き綴った記録。

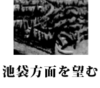
舞台明暗
警察官として明と暗に活躍し数奇な運命を辿った男の物語

『舞台明暗』

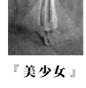
田中行雄
定価/700円＋税

健一郎は、人生の半分を闇の舞台で躍った。そこで人間の赤裸々な姿を見、人間とは何かを考えさせられた。同時に本当の愛とは何であるかを、しみじみと考えさせられた。その彼を献身的に支え続けたのは妻節子であり、彼女の香りは彼にとって忘れられない香りとして刻み付けられた。昭和の終戦後に警察官として明と暗に活躍して、数奇な運命を辿った男の物語。

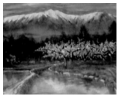
岩田二郎



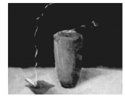
『池袋方面を望む』



『美少女』



『南アルプスとリンゴの花』



『緑の花瓶』